

山と博物館

第36巻 第12号 1991年12月25日

大町山岳博物館



雪に想う 写真と文 西沢泰夫

紅葉がおそく始まり、「なかなか西山の峰々（鹿島槍・爺・蓮華岳など）が白くならないね」などと言っていたら、十一月二十日一回の降雪で里の方まですっかり冬化粧してしまいました。おまけに東山（鷹狩山・霊松雪山）も中腹まで白くなりました。「二回東山が白くなると次は平地が雪におおわれる番だ」と大町の人々は思っています。おくれたお菜洗いも急ピッチで始まり、暖かい日が続いたおんきにしていた人達も気ぜわしく冬仕度に入り出します。

こんな時期になると雪を待つ人、雪は降らなくて結構という人、人それぞれの生活の場の違いから雪に対する想いが交錯し、日常のあいさつに微妙な影をおとします。そして数年前まで使われていた「大町以北山沿い地方」という冬の天気予報の区分が安曇平の雪の降り方を的確に表わしていたなども感じる季節の到来です。

安曇平を北進すると、日の当たっているところから三、四キロも進むと粉雪が舞うという日が時々あるようになります。冬の季節風と三千メートル級の山なみをもたらす自然現象です。また「雪がシンシンと降る」という表現があります。粉雪が音もなく一夜に降り積もり、遠くからきこえて来る種々の音が雪のクッションに吸収されてソフトトーンに変わる様を見事に言い得ていると思うのですが、色々の原因からあまり実感できなくなつた昨今です。

それにしても、今までの枯葉草の色あせた野山を一気に包みこんで白一色の世界にする雪は、カメラを持って歩きまわる私にとって想像もしなかつたところに思わぬ被写体を発見する「天の恵み」です。ゴツゴツした物を柔らかく包みこみ、見る角度で微妙に変わっていく雪の表面の光と影のトーンに夢中でシャッターを切ります。この写真は護岸ブロックです。

今年もカラフルな春夏秋冬をすぎてまためぐり来る白の世界に期待がふくらみますが、長期予報は暖冬を予告しています。春秋の長雨、いくつもの台風の影響、火山噴火と異常気象の続いた後、願わくば野に山にそれ相応の雪が降る冬らしい冬を、と想うのは私だけでしょうか。（大町市在住）

雪の世界の自然観察

雪上自然観察会

今井信五

夜どおし続く吹雪は、木々をゆすり、風と飛ぶ雪がたてる音が、あたりのすべてをのみこみます。

白馬の冬は厳しくて、空を見あげて心が踊り、ワクワクするような雪降りはめつたにありません。

小枝についた霧氷が陽に輝く朝には、突然駆け抜ける風は雪を散らしながら舞いあがり、吹雪の夜をそれぞれに安全な場所でもごした生きものたちは、生きるための動きを始めます。

そんな朝早く、私はスキーをはいて、近くの林へでかけます。私にとってそこは、自然がそのさまざまな姿を知識ではなく、直接肌で感じさせ、教えてくれる「自然の学校」なのです。

私のスキーは「歩くスキー」ともいわれている、長さ二メートル、幅五センチメートルの細長いクロスカントリー・スキーです。

クロスカントリー・スキーは北欧では、昔から雪の上を歩いたり、走ったり、滑ったりする道具として、郵便配達、通学、狩猟などに使われて生活の一部となっていました。しかし、除雪機械や自動車の性能が向上し、交通の便がよくなると、交通手段としての性格よりも、ノルディック種目といわれている距離競技やスキーマラソンといったタイムレースやスポーツとしての性格が強くなってきました。



1.霧氷の一種“エビのしっぽ”

それでも、森や野原を歩くことが好きな人々は、歩くための道具としてのスキーを靴のかわりにはいて、雪の世界へ飛びだしてゆきます。

スキーが生活の一部とはなっていない我が国では、クロスカントリー・スキーは汗がツラになつて髪から垂れさがり、必死の形相でコースを駆け上つたり、滑り下りたりと、見るからに辛そうな距離競技のイメージが強く、尻ごみする人が多く、スキーという一般的なにはゲレンデスキーということになります。

ゲレンデスキーは、自然の中での活動でありながら、自然に目を向けることがほとんどなく、ゲレンデやリフトといった人工的な施設のほか昨今では人工的な雪まで必要として、自然に与えるインパクトは決して少なくありません。

クロスカントリー・スキーを使った自然観察は、人工的な施設とは無縁のもので、歩く道具としてのスキーの利点を生かし、特別な技術や体力を必要としない、こともからお年寄までできる雪の世界の新しい楽しみ方といえます。

私は「自然の学校」で感じとることのできた自然の素晴らしさを多くの人とわかち合うために、スキーや輪かんじきを使った「雪上自然観察会」を毎冬開いています。軽い粉雪をかきわけて進むと、スキーの下では雪が音をたてます。それはちようど浜辺の鳴き砂のようです。

雪原を進むと足裏が雪面の固い、柔らかいといった微妙な変化を感じとり、この微妙な変化は雪原をわたってゆく風のしわざです。風は広い雪原のどこでもまんべんなく吹き抜けているわけではありません。地形や林の影響で強い風の通り道は決まっています、強い風の通り道では雪面が縮まり、その固さを足裏が感じとるので。

風や雪のつくり出す雪面の模様や造型は自然の手による芸術作品ともいえますが、よく観察すると、それらからも風向きや強弱を読みとることが出来ます。(写真3)

林に入ったら、目をつぶり周囲の音に耳をすましてみましょう。鳥の声、雪の重みで小枝の折れる音、遠くの車の排気音など、静かだと思っていた林の中でもいろいろな音が聞こえてきます。

雪の世界に慣れてくると、いままで気づか



2.クロスカントリー・スキーをはいて



3.雪と風の造形

ずにいたことのひとつとつがはつきりと感じられるようになってきます。動き回らず、同じ場所ですくすく観察することも自然を理解する上では大切なことのひとつです。こんどは、生きものの痕跡を探してみよう。

何者かが食いちぎった小枝、枯木につけられた無数の小さな穴、樹上のサッカーボール大の枝の固まりなど実に多くのものが見つけられます。自分ひとりの目では見えなかったものを他人の目を通して見ることが出来るのは自然観察会ならではの、といえます。

雪面に残された動物たちの足跡は普段めつたに出逢うことのない彼らの暮らしの一端を私たちに教えてくれるサインのひとつです。ひと筋に連なる足跡の全体を眺めていると、決まったパターンがあることに気づいてきます。前足、後足のワンセットがわかったらツ



5. 足跡を調べる



4. 足跡

メの跡や足を引きずった跡を探したり、歩幅なども調べてみると動物の動きが徐々にわかってきます。
足跡だけで種がわかるようになるには相当な経験が必要ですから、すぐに結論を出さず足跡を追って動物の行動を読み取るようにしましょう。どんな動物なのかわからなくてもここで止まって食事をしたとか、おしっこをしたとか、木の間をすり抜ける時に枝に毛をひっかけたとか、さまざまなサインを見つけていくことができるはずですよ。
葉を落とした樹木は全体の形がはっきりし



6. 冬芽

て、それぞれの枝ぶりが種類によって違いますが良くわかります。
小枝の先にある葉の落ちた跡、葉や花の芽がつくる形は、よく見ると、ヒツジの顔やビエロの姿に見え、その一つひとつに異なった表情があることに気づきます。(写真6)
雪上自然観察会の観察テーマをまとめてみると次のようになります。
①アニマルトラッキング、雪上に残された足跡、尿、糞、体毛、食痕などフィールドサインから動物の行動を読みとる。
②降雪のしくみ、雪結晶の観察、積雪作用と生物、雪氷面のさまざまな現象や氷を観察する。
③カラ類の混群観察を中心に、鳥類のフィールドサインを読みとる。
④越冬中の森で、樹形、冬芽などの観察、雪の下での植物の冬越しの姿を探る。
自然観察会は「お勉強会」ではありません。自然ってなんて素晴らしいんだらう

自然っていいなア
と、自然に親しみ、身近に感じることを第一歩として、自然を大切に思う人が増えることを願っている活動です。
自然を知識だけでなく、心で見ることのできる人、体全体で自然を感じることのできる人、観察会では、じっくり「観て」、ゆっくり「察する」文字通りの「観察」を大切にしています。
見えない生きものの一つひとつのつながりを見えるものにする自然観察という作業を通して、自然の大切さ、私達人間が自然の中で果たしている役割に、参加者みずから気づいてもらえたら……と願っています。
雪上自然観察会で入り込むフィールドは、誰のものでもなく、そこに昔から住む生きものたちのものです。私たちは彼らの世界にお邪魔させてもらっていることを忘れてはならないでしょう。
スキーやかんじきはくことや、自然を見ることだけが目的となってしまう、いたずらに森の生きものたちを脅かす存在にならない

よう、観察会を開く私自身も気を配らなければならぬことは、いうまでもありません。
白馬村落倉の雑木林とそこに点在する湿原には、ハクバサンショウウオなど、この地域を代表する生きものたちが人知れず暮らしています。
彼らの棲息域は、ペンション用地などとして開発され年々失われていきます。
「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」(環境庁)において絶滅危急種(放置すれば絶滅の恐れのあるもの)にあげられたハクバサンショウウオを、その生態解明前に絶滅させてしまわないように、雪上自然観察会などを通して、この地域の自然の状況をより多くの人に知ってもらい、たとえ住んでいるところは違っていても、自分のフィールドとして身近に感じてもらいたいと願っています。
この冬も、雪上自然観察会を開く日が近づいてきました。
(しろうま自然の会 事務局長)



7. 動物の食べあと “食痕”

自然観察会は「お勉強会」ではありません。自然ってなんて素晴らしいんだらう



8. 羽毛

ネパール、少し昔の話(前)

藤江 幾太郎

ネパールへ最初に入国した日本人は河口慧海師(一八六六―一九四五)とされている。明治の末期、仏教研究のため当時鎖国の西藏へ潜入すべく、ネパールの奥地ツクチェ村の郡長ハルカマン・セルチャン方に身を寄せ、情報収集、方策を練った。

この郡長の館は一時荒廃しかけたが、後継者ゴビンドマン・セルチャンが大修理し、二階の大きな仏間、慧海師の宿所を整備、多くの仏教々典や仏像も保管されていて、同館の中に慧海師記念室を作りたいと言っていた。

一九五〇年、フランス隊がアンナプルナー峰に登り、人類初の八〇〇〇米峰登頂となったのを契機に、五三年にエベレストへ英国隊

が初登、我が国も五六年に日本山岳会がマンスルの初登に成功、ヒマラヤ登山の黄金時代となるが、一方ヒマラヤ研究の権威深田久弥(作家)は山川勇一郎(画家)風見武秀(写真家)古原和美(医博)と組んでジュガル・ヒマルを探査したのが一九五八年、それぞれがその職域においてネパールを反映させた。畏友山川勇一郎(一水会、日本山岳会各会員)はこの成果として油絵大作二点を得、一水会優賞を受けた。

昭和四十三年四月、東京麻布の国際文化会館にて、ネパール旅行計画説明会を催す旨、創立早々の日本ヒマラヤ協会から連絡があった。手頃な費用と日数、心は大いに動いたが、未知への憂慮が先に立ち、なかなか決断が出来なかった。折しも七月、東京新宿の小田急デパートで立正大学のカピラ城址発掘調査報告展があり、釈尊の往時を偲ぶネパールに強く感動し、その足でヒマラヤ協会に参加申し込みをした。(つづく)



ツクチェの郡長館前の風景 (藤江画)

ドウラギリは曇え、寺院は淋しい。周辺に住人は少ない。

—文中敬称略—
(画家)



ナガルコットから見たジュガル・ヒマルの一部 (藤江画)

深田隊は今日のトレッキングの先駆者となった。ドルジェ・ラクパ峰が見える。



アンナプルナI峰 (藤江画)

1950年、フランス隊は向こうに見える尾根を乗越してミリスティコーラの中流に下って登高、M、エルゾグが人類で初めて8000m峰の頂に立った。レテの少し上手、カロパニから。

博物館だより

資料寄贈ありがとうございます

山岳写真等 4点 東京都新宿区 伊藤正一

スキーシール 1点

大町市常盤下一 渡辺一司

登山装備等 7点 池田町池田 小沢秋雄

チベットの民俗資料 7点

大町市宮田町 西田均

尻皮 1点 大町市南原町 太田祐司

登山靴 1点 大町市白塩町 渡辺逸雄

バツジ 1点 群馬県吾妻町 厚見巳之吉

登山装備等 25点

一九七六日本―イラン合同マナスル遠征隊

山岳書籍等 287点 松本市市里山辺 清水 貞

秩父宮様肖像写真等 2点

穂高町有明 青木 治

登山靴等 4点 池田町池田 宮沢正憲

スキー用具 6点 神戸市灘区 橋本昭一

ウエストン資料等 19点

大阪府豊中市 山崎岳麿

ビデオテープ 1点 穂高町有明 赤沢淳夫

輪かんじき 5点 大町市観光協会

(順不同 敬称略)

おわび

編集の都合で発行がたいへん遅れました。

おわびします。

山と博物館第36巻第12号

一九九一年十二月二十五日発行

発行所 長野県大町市 TEL 0261-2211

印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館

大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、三〇〇円(送料共(切手不可))

郵便振替口座番号(長野四一三三九九二)